

死霊

映画文学人生論

原作：埴谷雄高（1946）「近代文学」

『死霊』第1（1948）「真善美社」

『死霊』第5章—第9章（1975-95）「講談社」

参考：『不合理ゆえに吾信ず』（1950）「月曜書房」

『ドストエフスキー—その生涯と作品』（1965）

「おお、あなたは何を求められるんです」
「虚体です」

埴谷雄高の『死霊』を読む。こんな難解な書は私の頭では理解できるはずがないと、あきらめていたが、どんな書でもその気になれば、読めないことはないと思ひ直した。なせばなる。

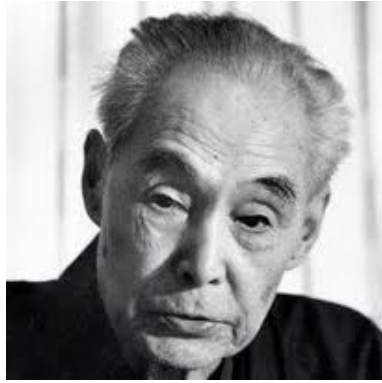
とはいえ、一度通読しただけで『死霊』の内容を理解できたという自信はない。皮相な感想にすぎないが、とりあえず、現在、私の頭のレベルで感じたことをメモしておく。

三輪与志という青年が郊外にあるXX瘋癲病院を訪れると、白い仕事着を着ている若い医師の岸博士が近づいてきた。やがて、岸博士が「おお、あなたは何を求められるんです」と聞くと、「虚体です」と三輪与志は答えた。

こんな風変わりな会話がえんえんとはてしなく続き、ついに作者の死により未完という哲学小説だ。物語の筋はともかくとして、肝心なのは観念であり、思想らしい。

そのなかでこの「虚体」という耳慣れないことがキーワードのようだ。虚体とは何か。おそらく実体の反対だろう。では実体とは何か。ほんとうに存在しているものである。二次的に存在しているものではない。

我思う、故に我あり。したがって、我の実体は存在しているはずだが、三輪与志は「私が私である」ということは不快だ（自同律の不快）という。



死霊

映画文学人生論

私も自分がいやになることがあり、その不快の気持はわかるのだが……。

『死霊』の作者について考えてみよう。埴谷雄高は野間宏、武田泰淳、梅崎春生、椎名麟三などととも第一戦後派作家の一人とされている。ただし、代表作の『死霊』は作者の死により中断され、未完。しかも、日常生活の匂いがほとんどしない哲学小説だ。ファンはいるが、一般読者向けの市場で、売れそうな小説ではない。

いったいどうして生活していたのか気になる。若い頃、治安維持法で逮捕されたが、転向し、釈放された。獄中でカントの『純粹理性批判』やドストエフスキの『悪霊』を読みふけた。

昭和十五年、「経済情報社」に就職。「左翼くずれ」が戦時色の一段と濃くなっていく時代に、ぶらぶらして遊んでいては危ない、という事情からだった。「資本主義をどう合理化するか。文学によって合理化した。それをうまく遣ったのが漱石ですね。……問題はやはり金なんですよ。資本主義的金なんですよ」という。

高等遊民にあこがれた漱石についてこのような見方をするとは経済オンチの文学者ではない。その気になれば、経済情報で食っていけるのに、戦後は高等遊民の「考える人」として悠々と虚体の暮らしを続け、満八十七歳まで生きた。

青虫はまだ神にへばりついている 埴谷雄高